

PROFILE

挾 間 章 博

福島医科大学・医学部生理学第一講座教授



私は、京都大学の医学部時代より基礎研究に興味をもち、当時京都大学医学部生理学教室の講師であった岡田泰伸先生（現・生理学研究所教授）の下で電気生理学の実験を始めました。細胞に水をかけると膜電位が変化する面白さから実験を続け、そのまま京都大学の大学院に入り、電気生理学的手法を用いて細胞容積調節に関わるイオンチャンネル系の役割を明らかにしました。その後、留学先のドイツ・ゲート大学（Frankfurt am Main）では、Eberhard Frömter教授の下で遺伝性のイオンチャンネル病として有名になった嚢胞性線維症のプロジェクトに参加し、更にUCLAのErnest M. Wright教授の下でNa-glucose共輸送体の機能解析を行ないました。平成5年からは、岡崎国立共同研究機構・生理学研究所において、細胞より放出されるATPの放出機構に関する研究や、嚢胞性線維症の原因となるイオンチャンネルであるCFTRに関する研究を行ないました。さらに、Jhons Hopkins大学において水チャンネル（アクアポリン）の中でもAQP-6にイオン透過性があることを明らかにいたしました。その後、岡崎に新たに発足した統合バイオサイエンスセンターに籍が移動し、本年3月31日まで務めておりました。このように、私は様々なイオンチャンネル・トランスポーターに関する研究を行ってきましたが、基本的な興味は、様々な物質が如何に細胞膜を通過するか、という事です。また上皮膜の場合は、細

胞膜ばかりでなく、細胞間隙を介した物質輸送も今後の課題として研究対象にして行こうと考えています。

現在、国立大学の法人化が目前に迫り、また公立大学の法人化も足音が聞こえて参りました。それに伴って、「大学が存続するためには、どんな教育・研究がなされるべきか」、という議論が交わされています。特に、地方大学においてはその危機感是非常に強いものがあります。これは、研究を始め、続けてきた大きな動機である「目の前に起きていることが、不思議で面白いから研究する」という気持ちからは遠く隔たった議論に思えてしまいます。しかし、システムの大きな変革に伴って生まれてくる混沌から、また新しい秩序が生まれ、その中で、本当に良いものが残っていくことを信じて、研究・教育を続けて行きたいと思えます。

略歴

- 1985 京都大学医学部卒業
- 1989 京都大学大学院修了 同・第二生理助手
- 1992 生理学研究所・助手
- 1999 基礎生物学研究所・助教授
- 2000 統合バイオサイエンスセンター・助教授
- 2003 福島県立医科大学医学部教授（生理学第一講座）